

振る、弾く、打つ、吹くといった行為により音は生まれ、音の出るもので人為的に音をたてることは神を招く行為であった。



鈴台付壺 杏遺跡
古墳時代後期（6世紀）

須恵器の壺に陶丸の入った鈴台が付く。傾けると「コロコロ」という音ができる。古墳の副葬品で、音による魔除け、招魂の祭具とみられる。



金銅鈴 1 平城京右京六条一坊
平安時代（10世紀中～後半）
2 平城京左京三条四坊
奈良時代（8世紀）

金属製の鈴は5世紀に朝鮮半島から伝わったとみられ、奈良時代には寺院の幡などにも多く取り付けられる。犬や猫、鷹狩りの鷹など動物に取り付けるのは位置を知らせるため、魔除けとして持ち物などにも取り付けられ、現在までつづく。



琴 平城京右京二条三坊
奈良時代（8世紀）

奈良時代の井戸杵に転用されていたヒノキ製の琴の上板。琴頭と側面を欠くが琴尾の楕形の突起間に別材を埋め込み、弦当てにしていることがわかり、六弦の和琴とみられる。琴の出現は縄文時代にさかのぼり、琴は男性が弾くもので、神の楽器、神の言葉を知る楽器ともされる。歌にともなう楽器は琴に限られ、奈良時代には中国の影響もあって教養人のたしなみともされた。

風鐸 大安寺西塔
奈良時代末～平安時代初頭（8世紀末～9世紀初頭）

大安寺西塔の塔頂につく相輪に吊り下げられた金銅製の鐸。風を受けて音をたてる。建物の装飾であるが、音による魔除けも考えられる。

